２２．Feb. ２００７（木）	XIENGKOUANG

XIENGKOUANG は正しく言うと Province であって、日本で言えば県にあたる。
我々が投宿しているのは、ポーンサワン市（phonesavan）である。
地方行政の中心で市内には Province のオッフィス、軍の司令部、教員養成専門学校などの施設が集中している。

８：００　VANSANA HOTEL で朝食。European style の朝食。快適。
ホテルの車で街へ。

９：００　昨夜、予約した旅行社（Indochina Travel）で手続きし、ツアーの車を待っていると、昨夜、ホテルで折衝した旅行社の若者が現れる。Indochina Travel の若者と何やらヒソヒソ話。
ツアー料金はいくらにしたのかのやりとりをしている模様。
この旅行社とは友達だと言うが、何か解せない。不審が残る。昨夜の９０ドル～１００ドルの価格設定は何だったのか？
Don't make a fool of foreign visitor とでも、喚きたい感じ。

９：１５　ツアー車が旅行社事務所前を出発。オーストラリアからのツーリストなどと同乗。合計９名の満席。他に、運転手とガイドが付く。ガイドの英語が聞き取りにくい。
ジャール（Jar 英語ではジャー平原と読むべき、Jar 壺）平原 Site 1, Hmong Village(酒と織物の村)、Site 2、昼食、Site 3、被弾したソ連製戦車を廻って、出発地に帰るコース。

１４：００　旅行社事務所前に帰着。
ＭＡＧの事務所へ行くも Closed。午後４時～８時まで開くとのこと。とりあえずＭＡＧ事務所隣接の同経営のレストランクレーターでパイナップルシェイクで休憩。美味。
市民の市場を見て回る。その後、中国資本が建設したショッピングセンターのような新しい施設を見学、買い物。
オープンを待って、再びＭＡＧ事務所へ。１０ドルの Donation でＴシャツをくれる。
街を散歩の後、再びレストランクレーターにて夕食。

２０：４０　ホテル帰着。

【ＭＡＧ】イギリスに本部を置き、シェンクアンで活動する不発弾処理専門組織。
ＮＧＯである。

早朝。ホテルのバルコニーから。朝もや。
樹木は日本の松と同じ。雀の囀り。

↑朝のポーンサワンの街。何かけだるそう。今日も暑い。

【ジャール平原（Jar 平原）に入る。】

ジャール平原

シェンクアン Province の東部に広がる、低い草（ところによっては低灌木あり）に覆われた広大な平原。３カ所の小高い丘に、大きなものでは直径 1.5m、高さ 2m にもなる石の巨大な壺が集中して存在する。これら３カ所が Plain of jar site 1, site 2, site 3 と呼ばれている。不思議な光景である。

これらの壺はサムヌア地方にあるものを含めると５００個以上あると言われ、ジャール平原にはその半数以上が有る。２世紀前後のものとも言われ、これが何であるかは、諸説あるようだ。曰く酒壺、米壺、石棺説である。調査によると、周辺から人骨、土器、石器、鉄器、ガラス玉などが発掘されている。

このことから、石棺説が有力である。ふたのあるものはほとんどない。ふたのあるものでも中には何も発見なかった。

盗掘にあったのかもしれない。そんなことを考えると我々の感覚には石棺説が納得し易い。

もともとこの地にあった岩石を掘り抜いたものではない。どこかから小高い丘に運び込まれたものであると言う。資材と労働力の調達はなど考えると、ミステリアス。

また、この平原はラオス内戦（ベトナム戦争）時代には Combat field,battle field になったところである。空からは、アメリカ軍による爆撃をうけ、悪名高いクラスター爆弾の攻撃にもさらされた。

今だに、不発弾処理に資金と労力が投入されている。

↓サイト１入口の看板

↑MAG(Mines Advisory Group)

ジャール平原サイト１の不発弾処理計画

ジャール平原サイト１，２，３、の不発弾処理は UNESCO、ラオＰＤＲツーリスト当局、情報文化省との共同プロジェクトとして実施されてきた。この不発弾処理のための資金は NZaid が用意した。

開始時期２００４年１月２６日。完了日時２００４年１０月２９日。処理された数量的データ。地表下まで処理された面積２４３７９平方M、外見上処理された面積２２５０００平方M。植生をカットした面積２１８３２平方M。発見された不発弾１２７個を破壊。発見された砲弾の断片など３１８１４個。

地表に設置した色づけしたコンクリートのマークは処理された区域を示す。白と白の間は地表下まで処理されたところ。赤で示す区域は地表下まで処理されていない。地表のものだけが処理されたいわゆる外見上処理された区域である。見た目でクリアーになっているだけ。白の区域に留まる様ＭＡＧは助言する。

観光案内看板には、ジャール平原サイト１は２５１ヘクタール。壺の数は３３４個。最大のもの径 2.5M,高さ 2.57M。

↑アメリカ軍の爆撃によるクレーター
看板に爆撃年が書かれている。１９７０
↓

↑MAG の標識。コースに埋められている

↑　サイト１の洞窟。天井には外
←　に通じる穴がある。人骨が発見されていることから、ここで火葬され、壺に埋葬されたとの説がある。
　ベトナム戦争当時は燃料庫や弾薬庫に使われたと言う。この方が生々しく現実味がある。

↑Trench Line の標識。ベトナム戦争当時の塹壕の跡。戦闘場面が地形と重なり、想像される。パテト・ラオ、モン兵士、アメリカ軍が消耗戦を展開したものと思われる。
ガイドは「モンは誰が兵士なのか分ら無かったとのこと」
ベトナム戦争当時に絡む説明をしながら、「ここにアメリカ人がいたら気を悪くしなでくれ」「気にしなくていいよ」との声。
モン兵士のことを語るのはタブーなのか？「なんでも聞いてくれ」とのこと。

↑ＭＡＧの白い標識内を歩いて見学する。通路は踏みならして裸地となっている。

ジャール平原の様相。従来から低い草で覆われた地域。乾季は干上がった茶色の大地であるが、雨季には緑の草で覆われ、美しい風景が出現するとのこと。政府はこの地域では畜産の農業を進めている。隣の地域は水も十分であり水田などの農業が推奨されている。土地利用政策が示されている。

【モン village、酒造りの村】

【サイト２】

←丘の下方に水田が見える。1ヘクタール程度である。谷筋にあり、天水が集まり、灌漑される。天水が無い季節は水稲作が不可。単純明解。山が終わる地点で少し自然の窪みが見られる。それだけのこと。右は燕を捕獲するための隠れ小屋。ここで日がな、獲物の飛来を待つ。これまた単純明解な狩猟。→

【昼食を採った「レストラン」】

↑レストラン裏。アヒルが。竹の柵のうち側が調理室

↑政府の公衆衛生啓発ポスター
蚊に刺されるな。手を洗え。
熱をかけて調理せよ。

【サイト３へ】

木橋を渡ってサイト３へ。
右は雨季に使用される。これだけの水位差。

畦を通る。左は石で補強されている。

水のあるところでは、野菜の栽培がおこなわれる。灌漑は同じやり方。畦を切って田越しに

【サイト３】

【被弾し打ち捨てられたソ連製戦車】

ベトナム戦争で戦場になり、被弾し打ち捨てられたソ連製戦車。松林の樹間から集落が見える。こんな処が戦場に。そして今、観光のスポットに。操縦キャビンに被弾した穴が。見つめるツーリストの心情は？

午後２時、再び、街へ帰る。
けだるい午後。

【新設のマーケット・ショッピングセンターのようなもの】

中国の支援で建設されたものとか。４階建ての建物にテナント方式で出店している。テナント料がいかばかりか、知らないが、一階はシャッターが閉まっている店が多い。何故か、吹き抜けが好まれるようだ。一階の噴水は水が無い。エレベターは動いていない。ここには食料品は無い。

モン族の衣装も売られている。周囲にモン族が多いことが推察できる。化学繊維で色も鮮やか過ぎるが・・・・

←ここでも大量のタイのＣＤが

大量の商品であふれている。くつ、カバン、バッグを売る店。アイテムも極めて豊富。殆どがタイ、中国製品。→支援で建設した商業施設に自国の製品を大量に送り込む狡猾さ。

←大量の札の印刷物が売られる。折り紙のようにして寺へお供え。何故か義歯が売られている。近くの道路際の掘っ立て小屋で足ふみ式のドリルで治療する歯科診療が行われていた。

←建物入口。４～５社が激しくシェア争いそしている。携帯電話業界。ラオテレコムが最大のようだ。

隣接のショッピングセンター。ＣＤ専門店が軒を並べ、自転車やバイクの店が多い。住み分けされている。

↑モン族（らしい）おじさん。この建物で店を出しているとのこと。家族がハノイへ留学中のことが自慢のようだ。ベトナムへの憧れが感じられる。

【庶民の食料品のマーケット】の状況をお見せする。

←トリが生体で売られている。バードアイランドレッドの様な羽に縞のある、見るからに旨そうな在来種である。

隣接して織物や繊維製品を売る店、バイクの修理、タイヤなどの店が集まっている。集客施設になっている。

サワガニ、ウナギ、カエル、タニシの類。新鮮、生きている

←かつては、こうしたモン族の衣装の多くの老人がこの市場を出入りし、出店もしていたと言うが、今では、その姿が見られないと言う。かろうじて、一人を見つけ、シャッターを押した。この市場も間もなく改築されるのだろう、市民生活の主要な場面から追い出されることが明白である。

←今、露天になっている場所も、以前は屋根が被っていたと言う。その下にはモン族の市が立っていたとのこと。近く、改修される模様。少量出荷の食材が並ぶ。右は漬物。これがなかなか、いける。

豊富な野菜類。香りのする野菜が多い。キャベツの荷姿に興味。茎の部分に紐を通し、輪結び。そのまま持ち運び可。栽培種子は殆ど、中国産。周辺の店で見かけた。

←単品少量を子どもが売る。

魚醤などの調味料

←奥のものは巨大なネズミ

←市場裏では工事。排水管か市場改修か

【MAGの Office】

ポスターに書かれている内容

ジャール平原における貧困との闘い。

不発弾処理、貧困にとって代わる観光、持続可能なシェンクアンにおける資源管理。

プロジェクトの実施者―ユネスコとMAG。協力―ラオスのユネスコ委員と情報文化省、観光所掌当局。資金提供者―ＮＺAID/UNESCO．実施期間―２００６年１１月１日～２０１０年１０月３１日。プロジェクトの目的―シェンクアンに於けるコミュニテイが観光から利益を得ることを可能にすること。（だから、貧困を削減し、ジャールサイトを保護すること。シェンクアンプロビンスのジャーサイトを含む７つのジャーサイトの不発弾の処理はこのプロジェクトを構成するものの一つである。不発弾はベトナム戦争時代からほったらかしにされ、重大な汚染とも言えるものであった。ジャーサイトを安全にすることは地域のコミュニテイやツーリストの安全を確保する上で重要なことである。さらに、不発弾処理の活動はラオス政府の世界遺産申請にとって重要なものとなる。もし、申請が承認されると、ツーリストは爆発的に増えるだろう。そうすれば、地域社会にとって、所得の機会を増大させることになる。MAG は、また、２００４年におけるジャール平原の不発弾処理にも関わってきた。この時には、１７５個を最も訪れる者の多い三つのサイト（約７０ヘクタール）で発見し、破壊した。

この今回の前のプロジェクトではMAGとUNESCOは考古学的不発弾処理の方法を開発した。鋭い破片にまで打ち砕く方法では、ジャーにダメージを与える可能性がある。したがって、そのような方法を採らずに、不発弾を安全にする手法を用いた。MAGはまた、考古学的な関心についての問題を惹起しないような特別の掘削方法を採用した。・・・・と書かれているがそれらの方法が如何なるものかは説明がない。・・・・

不発弾の種類が分解して展示してある。不発弾処理の状況が写真表示してあり、英語（聞き取りにくい）とジェスチャーで説明してくれる。よく言われるように気の遠くなるような作業。

右は悪評高いクラスター爆弾。写真の下に、子爆弾が分解され横に長く並べて展示。

左はドネイションボックス。１０ドルでここでしか手に入らないＴシャツをくれる。
１０ドルを投入。Great works. Peace forever in Lao from Japan Takuji Maekawa と署名。
右はアメリカ軍による爆撃を示す。黒いドットは Village の位置を示す。赤い大きいドットは戦闘爆撃機の爆撃地点をします。細かい赤い点々の範囲は B52 による爆撃を示す。B52 がクラスター。これを見ると、サイト１，２，３はまだ、少ない部類に入る。

ポーンサワンの街に陽が落ちて、長い一日が終わる。

ＭＡＧのオフィスの隣に、ＭＡＧに所属しているアメリカ人が経営するレストラン「クレーター」が。
良質な雰囲気で納得できる料理を出す。ここで夕食。
その隣はＭＡＧ活動の諸機材の置場。滞在した２日間、この車両が動いた形跡は見られない。